

A Little Flower in Buddha's World : A Representation of Kalmyk Buddhism Portrayed in Elena Gan's "Utballa"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2016-03-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高橋, 沙奈美 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00005964

ブッダの世界の小さな花

—エレーナ・ガンの『ウトバーラ』が描くカルムイク仏教の世界—

高 橋 沙奈美*

A Little Flower in Buddha's World: A Representation of Kalmyk Buddhism
Portrayed in Elena Gan's "Utballa"

Sanami Takahashi

マダム・ブラヴァツキーは幼少のうちから、ひとところに長く落ち着いて生活することのない「遊牧民的」生活を余儀なくされた。様々な民族と宗教が混在するロシア帝国の南方を転々と放浪する生活をしたこと、特にアストラハンで遊牧民のカルムイク人とそのチベット仏教に出会っていたことは、彼女のその後の人生に少なくない影響を及ぼしたと考えられている。母エレーナは、この放浪生活に耐えがたい疲弊を感じていたが、その一方で、西欧文明とは異なる生活の中にインスピレーションを見出し、「異郷」を舞台とした一連の小説を発表した。時に、1820–1830年代のロシア文壇を風靡したロマン主義は、「カフカスもの」と称されるロシア南方を舞台とした小説を輩出していた。エレーナ・ガンの創作も、この潮流に棹差すものだったのであり、1838年に彼女が発表した、カルムイクを舞台とする小説「ウトバーラ」もまた、ロシアのオリエンタリズムが生み出した作品の一つといえる。本稿はガンを育んだ人々や環境、彼女が抱き続けた理想や、彼女が生きた時代の歴史的・文化的背景を踏まえながら、ガンが見たカルムイクと仏教世界を小説「ウトバーラ」の中から読み解く試みである。

Madame Blavatsky had no choice but to move from one place to another from the time she was in the cradle. Her family nomadically moved around the southern part of the Russian Empire. Her encounter with the Kalmyk people in Astrakhan affected her for the rest of her life to some extent. Her

*北海道大学 スラブ・ユーラシア研究センター

Key Words : Elena Gan, Kalmyk, Buddhism in the Russian Empire, Caucasian literature, Russian Orientalism

キーワード : エレーナ・ガン, カルムイク, ロシア帝国の仏教, 「カフカスもの」小説, ロシアのオリエンタリズム

mother, Elena Gan, was also inspired by differences with the life in her “Europe,” when exhausted from her non-cultural—sometimes even barbaric—nomadic life.

She wrote several novels set in a strange land. Meanwhile, “Caucasian novels,” concerning the Southern Russian lands and peoples, played an important role in the history of the Russian romantic literature in the 1820’s and 1830’s. Gan followed the mainstream. In 1838, she published “Utballa,” set in Kalmykia, which should be considered as one of the fruits of Russian orientalism.

In this essay, I discuss the representations of the Kalmyk and their Buddhism in the novel, taking into account the author’s background, her ideals, and the historical and cultural circumstances of her time.

- | | |
|-------------------|----------------------------------|
| 1 はじめに | 4 混淆するヨーロッパとカルムイク、あるいは「異教」としての仏教 |
| 2 経歴 | |
| 3 コーカサスもの作家としてのガン | 5 まとめにかえて |

1 はじめに

1842年6月24日、新しい小説の構想と3人の幼い子供を残して、28歳のエレナ・アンドレーエヴナ・ガンは結核のため亡くなった。母と同じ名前を付けられた長女エレナ・ペトロヴナ、つまり長じて世界を幻惑することになる神智学協会の祖マダム・ブラヴァツカヤ（ブラヴァツキー）は、10歳にして母を失ったのである。エレナ・アンドレーエヴナは精力的に子供たちに教育を施す傍ら、大いなるロマンチストとして、社交界小説を次々と発表した人気の女流作家であった。母エレナの死後、1844–1845年ごろに作成されたと推定される『二人のエレナ』と題された母娘のポートレートからは、母を亡くした少女の静かな悲しみと恋慕が伝わってくるようである¹⁾。

後述するように、マダム・ブラヴァツカヤが幼少のうちから一家は、ひとところに長く落ちて生活することのない「遊牧民的」生活を余儀なくされた。様々な民族と宗教が混在する帝国南方やコーカサス（ロシア語読みではカフカース）を転々と放浪する生活をしたこと、特にアストラハンで遊牧民のカルムイク人とそのチベット仏

教に出会っていたことは、彼女のその後の人生に少なくない影響を及ぼしたと考えられている。エレナ・ガンは、この放浪生活に耐えがたい疲弊を感じていたが、その一方で、自らが身を置く西欧文明とは異なる生活の中にインスピレーションを見出し、「異郷」を舞台とした一連の小説を発表した。時に、1820-1830年代のロシア文壇を風靡したロマン主義は、「コーカサスもの」と称されるロシア南方を舞台とした小説を輩出していた。エレナ・ガンの創作も、この潮流に倅差すものだったのであり、1838年に彼女が発表した、カルムイクを舞台とする小説「ウトバーラ」もまた、ロシアのオリエンタリズムが生み出した作品の一つといえる。本稿はガンを育んだ人々や環境、彼女が抱き続けた理想や、彼女が生きた時代の歴史的・文化的背景を踏まえながら、ガンが見たカルムイクと仏教世界を小説「ウトバーラ」の中から読み解くことを試みる。

後述するように、コーカサスとそこに暮らす異教徒ムスリムを取り上げた作品群は18世紀ロシアの文壇を大いに賑わせたが、カルムイク平原と仏教徒を題材としたものはそれとは比較にならないほどわずかである。本稿は、「ウトバーラ」の中に19世紀前半のロシア知識人が表象し受容したカルムイク像を読み解く試みでもある。

エレナ・ガンについてはすでにいくつかの先行研究が存在する。ガンは19世紀前半の女流作家が活躍した「社交界小説」の旗手の一人であった。19世紀の文壇をしてジョルジュ・サンドに比せられたガンは、作品のほとんどで女性を主人公として取り上げ、女性の自己犠牲的・献身的愛情や才能ある女性を阻む社会の壁などを主要なテーマとした（Andrew 1993: 84-138）。愛についていえば、ガンにとって究極の理想とは、「真の愛」であるロマンティック・ラブを経て結婚し、妻となり母となる女性の姿であった（M. F. 1911: 59）。彼女の作品の多くに共通するプロットは、この理想に到達しうる「真の愛」がこの世には存在するのに、理想の実現は「虚偽の愛」や世間の虚飾、封建的因習などによって阻まれるというものである。彼女の小説で「真の愛」を抱き悩み苦しむのは女性で、「虚偽の愛」の刹那性を楽しむのはもっぱら男性である。また、女性の社会的限界については、才能と意欲にあふれる女性であったガン自身が文壇で活躍の幅を広げるにつけ感じていたものであった。彼女は女性が学問や社会的活動の可能性から遠ざけられていることを、小説の中で訴えた（Andrew 1993: 138）。

一方、ガンはロシア帝国の南方辺境地域を舞台とした小説をいくつか残したが、これは18世紀初頭にプーシキンが切り開いた「コーカサスもの」と呼ばれる文学のジャンルに属するものとみなすことができる。乗松亭平はガンのテキスト分析を通し

て、社交界小説の持っていた社交界の虚偽に対する抗議と、コーカサスものに登場する「高貴なる野蛮人」がロシアの貴族社会の「文明」の程度を露呈させるやり方を近似的に併せ持つものであったことを明らかにしている。そして、ガンの小説の要諦が、社交界の「虚偽」と「真実」の情熱愛の二項対立の解消不可能性にあり、それは言い換えれば、「芸術と生活を重ねあわせ、芸術のように行為することの限界」にあったことを指摘している（乗松 2009: 180）。実現されない理想に対する飽くなき追求と焦燥、そして満たされぬ思いがエレナ・ガンの執筆活動を支えるエネルギーであったと指摘することができるだろう。

2 経歴

エレナ・ガンはロシアの公 князь に連なる高貴の家の出自である。彼女の家族とその経歴については、彼女の死亡記事や死後まとめられた伝記（Некрасова 1886: 335–354, 533–574）、妹ナジェージダ・ファジェーエヴァによる両親の記録（Фадеева 1886: 749–751）や娘ヴェーラによる回想（Желиховская 1887: 734–766）などがあるが、こうした様々な資料を丁寧に読み込んでまとめたエイプリンの未刊行博士論文（Aplin 1988）が最も信憑性が高い。

ガンの母エレナ・パーヴロヴナ・ドルゴルーコワ公女（1789–1867）は13世紀のキエフ大公ミハイル二世にまでさかのぼることのできる名門ドルゴルーコフ家の一員であった。この時代の女性にしては珍しく、彼女は五か国語に通じ、歴史の知識に富み、自然科学にも明るく、考古学、古銭学を学び、彼女による植物学の研究は後代にまで影響を残すもので、50巻に及ぶ膨大な量の植物スケッチのコレクションを残した（Aplin 1988: 209–210）。

父アンドレイ・ミハイロヴィチ・ファジェーエフ（1789–1860）は、三等文官にまで出世した貴族である。軍人の父とバルト地方出身のドイツ系の母の間に生まれた彼の出自は、妻となった公女には及ばなかったが、将来を嘱望された若者であった²⁾（Фадеев 1897: 7–8; Фадеева 1886: 750）。ファジェーエフは1815年から34年に至るまで、エカテリノスラフ（現ウクライナ領ドニプロペトロウシク）を拠点に勤務し、ノヴォロシア外国人入植者保護室 контор опекуства иностранных поселенцев の責任者を務め、1834年にオデッサに移住して、ロシア南方外国人植民者保護監督委員会で勤務した。この期間には入植地を精力的に訪問し、住民の生活状況の把握に努めている。そののち、アストラハンで遊牧民族保護監督長、サラトフ県知事、コーカサス統

治局議員などを歴任した。彼が官吏として勤務した土地は、スラブ系民族だけでなくさまざまな遊牧民、ユダヤ人、コサックや入植したドイツ人など、多様な習慣や伝統を持つ人々が混住する地域であった（井上論文）。

長女エレナは、教養人であった母から外国語、音楽、文学の手ほどきを受けた。時はロマン主義文学が興隆を極めていた時代であり、エレナもまた読書に耽溺した。13歳のころには、夜憑かれたように詩や短編を認め、日中それを焼き捨てるという執筆活動を繰り返していたとされる（Aplin 1988: 212）。1830年、16歳になったエレナは、ドイツ系軍人家系の出身である陸軍大尉ピョートル・アレクセーヴィチ・ガン（1799-）のプロポーズを受け入れ、結婚する。軍服に身を包んだ31歳の壮年男性は、ドイツ系の出自を持つ將軍を父とし、外国語に堪能で、機知に富み、首都との付き合いの経験があった。地方都市に育ったエレナにはピョートルのこうしたバックグラウンドが魅力的に映ったのだろう（Aplin 1988: 212-213）。しかし、この結婚生活は生涯にわたる苦悩の種となる。1836年に首都ペテルブルグから親戚に宛てたエレナの手紙には夫婦の性格の違いを如実に示すエピソードが綴られている。ペテルブルグ郊外のフィンランド湾に面した街オラニエンバウムを訪れたエレナは、同じく夢想家的な義弟と海に沈む夕日にうっとり魅入って、プーシキンの詩を口ずさんでいる。その二人の後ろでは、夫ピョートルが夕食の設えられた食卓につき、早く食事に取り掛かってひと眠りしたいものだと、いらいらしながら二人を待っている、というものである（M. F. 1911: 58）。

1831年生まれの長女エレナを筆頭にエレナ・ガンは4人の子供を出産した。早世した長男のアレクサンドルを除いて、神智学者として世界に名を馳せた長女エレナ、小説家となった次女ヴェーラ、そして次男レオニードは法律家と、それぞれ個性的に成長した。ガン一家は、キエフ県やエカテリノスラフ県を転々と移動する夫ピョートルの軍に従いつつ、ある時にはサラトフやアストラハンへファジェーエフ家を訪問し、さらにはエレナの病氣療養を目的としてオデッサに移住するなど、ひとところに長くとどまることを知らない遊牧民的生活を続けた。猥雑な軍の雰囲気や知的交流のない不便な地方の生活にエレナは疲弊し、子供たちの養育に活路を見出そうと試みた。しかし、彼女のロマンティックな夢想を冷笑的に見下す実務的な夫との生活に絶えず神経をすり減らし、また彼女の中にあふれる創造への衝動は募る一方で、エレナは常に満たされぬ空虚さを抱え込んだままであった。

彼女の人生の大きな転機となったのが、1836年春から翌年5月までの首都訪問である。きらびやかな都市空間や、劇場、文芸サロンなどの文化装置はエレナを魅了

した。そして彼女は、東洋学に造詣の深い作家・編集者のオシプ・センコフスキーと出会う。この出会いを契機として、エレナは少女時代に没頭した執筆活動にふたたび目覚めた。1837年、センコフスキーが主催する雑誌『読み物叢書 Библиотека для чтения』にゼネイダ・エル＝ヴァの筆名で処女作「理想 Идеал」が発表されると、1838年には本稿が取り上げる「ウトバーラ Утбалла」と、コーカサスものの「ジェラレディン Джеллаледдин」を発表、以後も毎年新しい中編小説を『読み物叢書』に掲載し続けた。特に1841年に発表した「テオファーニヤ・アッピアッジオ Теофания Аббиаджо」は高い評価を得、これを機に一流雑誌である『祖国雑誌 Отечественные записки』での小説掲載の道が開けた。エレナは死の直前まで執筆活動を続け、「リューベンカ Любенька」と「徒な天賦 Напрасный дар」を『祖国雑誌』に発表することができた。

彼女は短い生涯のうちのさらに短い作家人生の中で11の作品を残した。それも子供たちの世話や家政、絶え間ない転居の合間を縫って、夫との不和によるストレスと、病苦に悩まされながら、まさに憑りつかれたように執筆を続けたのである。ペリンスキーはガンを指して「個性が作品と強く結びついた」タイプの作家と評している³⁾が、彼女が感銘を受けた生活の舞台は、そのままいくつかの作品の舞台となった。彼女は特に1837年と38年の夏のコーカサスへの旅行で、彼女にとっては稀な幸福感を味わい、コーカサスの社交界や異教徒・異民族を主人公に据えた作品を発表している⁴⁾。

本稿が扱う小説「ウトバーラ」の舞台は、アストラハンをモデルにした地方都市の社交界とカルムイク・ステップであるが、これはガンの父アンドレイ・ファジェューエフが保護監督官の任務を負って赴任した地であり、エレナは子供たちを伴って1837年にこの地へ移住したのであった。この期間に、エレナは父や夫とともにカルムイクの領主セルベジャブ・チュメン公（1774–1858）の招きに与り、その習俗や同時代の生活を身近に観察する機会を得た。ここで彼女が見聞したもの、他の多くのコーカサスもの小説と同様、詳細な風俗描写となって現れ、一種の民俗誌としての志向性をうかがわせるものとなっている。

3 コーカサスもの作家としてのガン

ヨーロッパのロマン主義文学は、西欧文明社会の因習や制約にとらわれない「野生」や「神秘」に触れる場として、オリエントを重要な舞台とした。一方、ロシアのロマン主義の文人たちは内なるアジアに目を向けた。コーカサスである。ロシア文学

史において「コーカサスもの」と呼ばれるオリエント表象の嚆矢となったのは、1821年に発表されたプーシキンの『コーカサスの虜』であった。首都ペテルブルグで展開される「ヨーロッパ文明社会」の虚飾に飽いたロシアの知識人たちは、コーカサスに未知の世界と新しい可能性を見出そうと試みた（Layton 1994）。ロシアのオリエンタリズムの端的な特殊性は、ヨーロッパでもなければアジアでもないロシアの位置づけにあるといえよう。帝国の陸続きの領内にアジアを内包し、膨張してきたロシアには、外部世界としてのオリエント、より正確にはヨーロッパ的自己とアジア的他者を隔てる明確な境界が存在しない。こうしたあいまいな状況の中で、非キリスト教的文明圏に生きる遊牧民や山岳民をアジア的「他者」として、ヨーロッパ的「自己」に対峙させていったのが、コーカサスものの小説であった。

1829年、プーシキンは未来の妻ナターリア・ゴンチャローワに求婚を断られた夜、南方への二度目の旅に出る。旅の途上で出会ったカルムイクの娘について、プーシキンは以下のような詩を残した。

「カルムイクの娘に」（1829）⁵⁾

さらば、かわいいカルムイクの娘よ！
さっきの気持ちとは裏腹だが
ありがたい習性に引き止められて僕は
ステップのただなかに出かけるのは断念した
お前の天幕の後を追うのはやめだ。
もちろん、お前の眼は細く
鼻は低くて、額は広く
片言のフランス語を喋ったりしない
お前は足を絹で締め付けていない
イギリス式にサモワールの前で
パンを小さくちぎって並べてみたりしないし
『サン・マール⁶⁾』に感嘆したりしない
シェークスピアをちょいとばかり論じてみたりしないし
夢想にふけったりしない
考えることがない時には
「でも何処に⁷⁾」を口ずさんだりしない
社交の集まりでギャロップを踊ったりしない...

何が必要だというのか？——ちょうど半時
 馬車に馬をつなぐのを待つ間
 僕の頭も心も夢中だったんだ
 お前のまなざしと野生の美しさに
 友人諸君！いずれにしても同じことではないか
 あだな気持ちに我を忘れられるならば
 きらびやかな大広間も、ファッショナブルな劇場の棧敷も
 あるいは遊牧民の天幕も

一見、カルムイクの娘の魅力に引き込まれた「あだな気持ち」を軽妙に謳っているように見えるが、彼女の魅力が文明社会の裏返しにすぎないことは、それが否定形で書き連ねられていることに明らかである。つまりこの詩は、カルムイク娘への賛歌であると同時に（あるいはそれ以上に）、プーシキンが逃げ出してきたヨーロッパ的社交界に暮らす女性たちへの意趣返しなのである。だからこそ、ロシア文学にコーカサスものがあふれ、「野生の美」が陳腐化したとき、この同じカルムイクの娘はその魅力を失い、冷笑の対象となる（乗松 2009: 151）。この旅を題材にとって 1836 年に出版された『エルズルム紀行 Путешествие в Арзрум』は、「ロシア文学における東方へのロマン主義的興味の高まりの墓碑銘」と称される作品となった（シンメルベンニク 2013: 97）。この作品の「「因習」と化した東洋趣味オリエンタリズムに対する揶揄は明白」（乗松 2009: 150）で、先行するテキストに対するパロディと皮肉に満ちたものとなっている。カルムイクの娘に宛てた詩は、そうした自己パロディの例としてよく知られている。

数日間、私はカルムイクの天幕（白いフェルトで覆われた格子状の垣）を訪れた。家族全員が朝食のために集まっていた。真ん中で大鍋がたぎり、天幕の天上に開けられた穴から煙が立ち上っていった。かなり綺麗な顔立ちをした若いカルムイクの娘が煙草をくゆらしながら裁縫をしている。私は彼女と並んで座った。「名前は何というの？」「***」「いくつだい？」「十と八つ」「何を縫っている？」「ズボン」「誰に？」「自分に」。彼女は私にキセルを渡すと朝食に取り掛かった。大鍋には羊の脂と塩を入れた茶が煮えている。彼女は自分の柄杓を私に勧めた。私は断りたくなかったので、息をつかないようにしてぐっと飲み干した。他の民族料理にこれ以上胸糞悪いものがあるとは思われない。私は口直しに何かもらえるよう頼んだ。私には干した馬肉が一切与えられた。それで嬉しくなった。カルムイク流のコケットリーは私を驚かせた。私はそそくさと天幕を出ると、ステップのキルケー〔ギリシア神話の女神。食べ物を与えて人間を豚に変えてしまう〕のもとから逃げ出した。

文明社会の俗物的美に対するアンチテーゼもまた俗物化してしまえば、残るのは粗野でぶっきらぼうな散文的存在でしかない。1838年、ガンが『ウトバーラ』を世に問うたとき、「東洋趣味」は、ロシア・ロマン主義文学の世界において、因習を逃れた自然体と野生の美しさを持つ存在としてその価値を失い始めていたことが指摘されよう。

4 混淆するヨーロッパとカルムイク、あるいは「異教」としての仏教

ガンは小説『ウトバーラ』の中で、カルムイクの習俗を全般的に粗野で野蛮、封建的なものとして俗悪に描き、ロシア上流社会の中の洗練されたヨーロッパ文化の要素を抽出して描き出し、対比させている。その点ではこの小説は近代オリエンタリズムの手法を踏襲しているようにみえる。しかしこの小説がサイド的な二項対立で済まされないのは、女主人公ウトバーラが、ロシア人とカルムイク人の混血、富裕な古儀式派商人がカルムイクの貴族の娘に産ませた婚外子であるという設定のためである。エキゾチックな美貌とヨーロッパの素養を身に着けた彼女は、真実の愛とそれを貫くための自己犠牲を厭わない、究極の理想的女性として描かれる。以下、小説の分析に当たっては、『読み物雑誌』に掲載された版を用い、引用ページ数を丸括弧で、訳者による註や省略を角括弧で示す。

ウトバーラはその誕生の時からすでにスティグマを刻まれていた。ロシア人の父親は、財産家ではあるものの、非社交的で閉鎖的な老人である。彼はまた、国家と正教会の弾圧の対象であった古儀式派という信仰集団に属している。10世紀にビザンツ帝国から東方正教を受け入れたロシアでは、中世を通じて独自の儀礼文化が発達した。国力を増したロシアは17世紀中葉にこれをギリシア式のものに改め、東方正教会における指導的立場を確立することを図った。これに対して従来の典礼を固持し、「異端」を形成した人々が古儀式派である。古儀式派信者は信心深さと勤勉さで知られており、商人として成功した人々に古儀式派は少なくない。勤勉な商人として財を成したウトバーラの父はしかし、結婚の手続きを踏まないまま異教徒の娘に対して姦淫を犯した点で模範的な古儀式派信者とはいいがたい。ウトバーラの母親は出産ののち、カルムイクの貴族へ嫁に出される形で娘ともどもロシア人社会から放逐された。

ウトバーラが7歳になったとき、彼女の父親は自分の財産相続者たちと争い、彼女に対抗する目的で娘をステップから連れ戻す。ウトバーラは古儀式派の洗礼を受け、

「フョークラだか、マトローナだか」古臭い田舎女を髣髴とさせる「恐ろしくひどい名前」を与えられる（145）。しかし老人は娘の世話を見るわけでもなく、代わって「教養があって、礼儀正しいヨーロッパ人」（145）たる隣家のスネージン夫人が、彼女に愛情に満ちたヨーロッパ式貴族教育を施した。スネージン家では彼女の洗礼名を厭い、カルムイクの名で彼女を育てていくのである。

こうしてウトバーラは「アジア諸民族と我々正教徒のあれほどの混淆をロシアで目にするには他にないでしょうな」（144）と土地の老人に言わしめるほどの素晴らしい娘に成長する。彼女の身体は典型的な「東洋の女性美」の象徴である「長い黒髪」や「黒い瞳」を備えたものとして描かれるが、そうしたオリエンタルな美は「ヨーロッパ的」な器の中に収まっている。

彼女の顔の輪郭にはカルムイク的なところが全くなかった。しかし、彼女は形よく真珠のように白い歯と、この世の中の黒いもののうち最も黒いと思われる黒髪——素晴らしい髪で絹のように柔らかく、驚くべき長さを持っていた——を自分の母親から受け継いだ。瞳もまた黒かった。驚くばかりのきらめきをたたえた瞳はまさに黒いダイヤであった。しかしヨーロッパ的な形を保っていた。（146-147）

ロシアの「ヨーロッパ的」な上流社会の中で、ウトバーラは「ヨーロッパ的」身振りを備えながら、東洋を匂わせる存在であり続ける。そのために彼女は社交界から疎んじられる一方で人々の目を惹きつける。ペテルブルグで仕官していたスネージン家の一人息子ボリスは、ウトバーラの幼馴染でもあったが、休暇で故郷へ帰った際、アジア的出自ゆえに、社交界の「壁の花」となっていた彼女にダンスを申し込む（151）。やさしい眼差しを向けてくれたボリスに、ウトバーラは恋をする。しかし、二人が愛を確認しあうのも束の間、ボリスを含めたスネージン一家はペテルブルグへ移ってしまう。一方のウトバーラは、脳溢血で父を突然失い、彼女一人が莫大な財産を相続することを阻もうとする人々によってステップへ送り返され、彼らから金を受け取ったカルムイク貴族によって軟禁状態に置かれる（176）。彼女は逃亡に二度も失敗し、自殺さえ試みるがそれも失敗に終わる（180）。そのうち、ウトバーラは70歳になる領主ジルガールの目に留まり、その妻とされる（188）。カルムイクの庶民の女さえ自由を謳歌しているのを見るにつけ、家政上の雑事で気を紛らわすことも許されない「白い骨」、すなわち貴族のウトバーラはますます自由を渴望する。

ここの女たちは完全な自由を享受している。マホメットの遊牧の息子たちの習俗とは反対に、ブッダを崇拝する人々の妻たち、娘たちは家庭の責務を果たし、すべての娯楽にも参加する。[ウルスが遊牧地に落ち着くと] 庶民のカルムイクの妻たちは、男の仕事も女の仕

事もみんなこなし、天幕を直したり、食事を準備したり、鞍をきれいにしたり、服を縫ったりする。その一方で男たちといえば、ぶらぶらしてばかり。野原で狩りをしたり、キセルをくわえて日向ぼっこをしている（185）

随所にちりばめられたカルムイク人の習俗に関する記述から、作者エレナ・ガンにはカルムイクの日常をつぶさに観察する機会があったことがうかがわれる。しかしペテルブルグの生活に憧れるガンの目についたのは、「野蛮」で「不潔」な生活であり、そこにエキゾチズムや神秘的魅力が入り込む余地はなかった。

ウトバーラを見失って5年、戦いで負傷した傷の治療にコーカサスへ向かうボリスが、旅の途中で訪れるウルスは散文的に描かれる。

およそ100くらいの天幕が規則正しく円形に並んでいた。真ん中には寺院と領主の館がそびえていた。いくつかの住居では低い扉が開かれており、家の中できらめく炎が見えた。傍ではカルムイクの老婆がキセルをくゆらせている。[...] もじゃもじゃ頭の子供たちは全くの裸で、犬と戯れながら駆けまわったり、草の上に寝転んでいる。（189）

この天幕の群れの真ん中に住む領主の妻こそウトバーラである。領主はウトバーラを喜ばせるために、ヨーロッパ的調度を買ひ与えていた。「人の良い老人は彼女をかわいがり、彼が理解するところのぜいたく品で埋め尽くした。ウトバーラに気に入るようにヨーロッパ風の習慣をさらにたくさん取り入れた。領主の天幕には椅子やテーブル、フォークが現れた。不潔な感じがなくなり、以前のモンゴルの家庭的なもてなしは、ロシアの屋敷風のそれに類したものにとってかわった」（189）。ボリスがそれと知らず、領主の天幕へ招き入れられると、「中央には長いテーブルが置かれており、ヨーロッパのしきたりに従って整えられていた。食器の間にはグラスが列をなしてそびえ、テーブルの端にはブロンズの蠟燭立ての上で蠟燭がきらめいている」（201）。西欧的な設えはウトバーラの手になるものであるが、しかし、野蛮な民の間にあって、ヨーロッパ文明はグロテスクに濫用されるほかはない。

美しく食卓に着くための礼儀作法の一切を無視してワインが注がれた。シャンパンはコップの中に泡立っている、シャンパンは知識層が愛好する全くこの世のものとは思えぬ飲み物で——やあ、飲みすぎだ！——モンゴルの遊牧民たちのゲル、フビライ・ハンの末裔たちの住まいにまですでに浸透しているのだ！（202）

ガンが描くジルガールの館は、彼女自身が訪問したチュメン公の邸宅をモデルとしていることが推測される（井上論文）。チュメン公自身はパリ訪問の経験を持ち、ヨーロッパ的文化や生活様式を積極的に取り入れた人物であったが、小説ではこうしたすべての「趣味の良さ」はヨーロッパ的なウトバーラのためにもたらされ、また彼女に

よってのみ維持され得るものとなっている。ガンの小説の中で、カルムイクの社会は因習にとらわれたまま、野蛮状態から抜け出すべを知らず、またその意思も持たない集団に貶められている。そして、カルムイクの野蛮、残忍性、悪趣味、封建的因習多くは、仏教と結び付けられている。

〔儀礼がおこなわれる〕天幕の壁は高価な布で覆われ、青や赤や金色の顔をした様々な異形の神たちの絵がかけられていた。[...] すべてが静まり返っていた。僧たちはチベット語で読経しながら、奇妙に体を動かしてあちこちと動いていた。読経の声は次第に高まり、楽器の拍子で伴奏をつけ始めた。最初は静かに、しかし次第に大きく、どんどん大きく音は響いた。とうとう太鼓がドーンと音をたて、喇叭が吠え、シンバルが鳴った。これらが鈴の音や様々な音色の笛のピーピーいう音と混ざり合って、それは恐ろしいハーモニーとなって客人たちの耳をつんざいた。彼らをその場にとどませたのは、礼を失してはなるまいという心持ばかりだった。(210)

ただし、カルムイクの「仏教」に対するガンの理解は、当時のコーカサスもので描かれたイスラームの描写に大きく影響を受けている可能性が指摘される。コーカサスものが好んで扱った特徴的テーマの一つに、キリスト教徒とムスリムの間の結婚と改宗問題があげられる。そこではムスリムはすべからくパートナーに導かれるまま改宗し、キリスト教徒のほうが改宗することはありえないのである。というのも、読み書き教育とセットになったキリスト教への改宗が、「文明化」の高みへ近づく重要な歩みなのであり、キリスト教からの改宗は、識字の放棄が不可能であると同様にありえない。この不文律に従ってガンの小説でも、ウトバーラと領主との結婚に際し、正教徒ウトバーラの仏教への改宗問題は言及されない。ところが、この異教徒間の結婚はイスラーム的文脈で問題とされるのである。

領主〔ジルガル〕の帰還はウルス全体を憤慨させた。彼らはハルツィグ〔領主ジルガールの弟〕の兄がただの貴族の女性——しかも半分ロシア人で彼らとは別の神を信じている——と結婚したことを知ったのだった。異教徒とカルムイクの結婚は法によって禁じられていたわけではなく、慣習的なものではあったが、ハルツィグは怒りに我を忘れた。[...] ハルツィグは前より天幕にこもるようになり、さらに偉大な釈迦牟尼に帰依しない者すべてを以前に増して厳しく迫害するようになった。(189)

「異教徒との婚姻を法によって」制限しているのはイスラームであり、当時のカルムイクで奉じられていた仏教がそこからどのような影響を受けていたのかはわからないが、この描写にこれら南方の諸宗教の混合を読み取ることができるだろう。また、「釈迦牟尼に帰依しない者すべてを以前に増して厳しく迫害する」領主の弟ハルツィグは狂信的で狡猾、保守退嬰なカルムイクの姿を体現する人物として描かれている。

宗教的不寛容と結びついた仏教の描写もまた、「異教」としての仏教が晒されていたオリエンタリズム的視点を示しているだろう。さらに、ガンの描く釈迦牟尼も、地上の人々の行為を裁定し、死後の運命を決定する存在であるという意味で、一神教的存在である。

今や「ウルスの」全員がハルツィグの言うことを繰り返していた。つまり彼らの君主の結婚は神々を恐ろしく怒らせ、釈迦牟尼は全ウルスを地獄の王であるエルリク・ハンに間違いなく引き渡すだろう、というのだった。(190)

このほかにも、「義」を貫くための殺人を釈迦牟尼が褒賞するだろうといったような記述が作品中に散見される。帝政期のカルムイクの人々が信奉していた仏教の具体的な姿というのは、資料の破棄と散逸のために、その実態に迫ることが極めて難しい。また、周辺をムスリム遊牧民に囲まれていた彼らが、イスラームから何らかの影響を受けた可能性は否定しきれない。しかしながらこうした留保にもかかわらず、ガンの小説から読み起こされる、ロシア知識階級の通俗的仏教理解は、キリスト教的宗教概念と、イスラームをはじめとしたさまざまな「異教」のイメージとの類推から進められたことが指摘されよう。仏教が明確な「神」概念を持たないにもかかわらず、釈迦牟尼＝ゴータマ・シッダータは「神」に比され、イスラーム世界やキリスト教的理解の範疇には存在しない転生ラマへの崇敬は、小説では省かれている。

ウトバーラはボリスと一緒に逃げることを不可能であることを悟ると、残酷な結末を受け入れて、ボリスと短い愛の時間を過ごすことを決める。「ひ弱なヨーロッパ女ならおそらくしかねたであろう」この決断には、ウトバーラに流れる「モンゴルの血の力」が不可欠であった(230)。何も知らぬボリスに、必ず後を追うと約束したウトバーラは、一足先に出立することになったボリスにキリスト教の祝福を請うのである。

ウトバーラはボリスの前に跪くと、彼のベストのボタンをはずし、その胸から十字架を取り出した。それを彼に差し向けると「祝福してちょうだい!」といった。

「何を言うんだよ? 何のために?」いぶかしげにボリスは訊ねた。「まるで僕と、なんだか永遠に別れてしまうようなさよならの仕方をするんだな。」

「いいえ、もう一度会えるわ。[...] 別れのしるしでないとしたら、次に会う喜びのために、私を祝福して! ...お願いするわ、祝福してちょうだい! [...]」

ボリスは十字架を取り出し、彼女の頭の上に救いのしるしを描いた。彼の頬を大粒の涙が伝った。ウトバーラの瞳は乾いていた。(242)

ボリスが去った後、カルムイク人たちは「民衆の慣習」に従って彼女の天幕を持ち物を破壊し、衣服を引き裂き、打擲と悪罵の限りを尽くした。そして、領主の弟ハル

ツィグと高僧たちの手によって瀕死のウトバーラは生き埋めにされる。ウトバーラは「モンゴルの血」によって、おぞましい死を迎える決意を固めながら、同時にキリスト教徒としてアジア的残虐を受け入れたのである。

5 まとめにかえて

ロマンチスト、エレナ・ガンは19世紀前半の文学作法と個人的経験にのっとり、いくつかのコーカサスものの作品を書き上げた。ただし、そこに書き込まれる「アジア」の姿は徹頭徹尾醜悪な他者である。ガンが見ていた「アジア」は「ヨーロッパ」との混淆によってはじめて価値をもつ。首都ペテルブルグからの訪問者であるコーカサスものの作家たち、ベストゥージェフ＝マルリンスキーやプーシキン、レー尔蒙トフがみた「高貴なる野蛮」の「アジア」とは異なるものであった。首都の華やかな文化にあこがれ続けたガンは、それをきわめてナイーヴに「ヨーロッパ文化」と同定し、その価値を賛美することができた。彼女の作品がサイド的オリエンタリズムの枠に収まらないとすれば、それは彼女自身が舞台である「アジア」と往来する「ヨーロッパ」の辺境に生きていたということにあるだろう。彼女は当時のペテルブルグの文学会を風靡していた「東洋趣味」に駆られてコーカサスものを認めたということもできるが、同時に彼女はカルムイク草原やコーカサスの中の離れ小島のようなロシア人社会に生きていたのであった。コーカサスが描き尽された時、それはプーシキンにとって散文的なものとなったが、ガンにとって首都の文化的な生活からかけ離れた日常世界は常に散文的であった。ガンにとってのアジア的世界は、人間の自然や感情を解放することができる「異郷」であるよりむしろ、独自の因習や封建的な伝統にとらわれた陰鬱な生活圏だったのである。

混血のウトバーラにヨーロッパでもなくアジアでもないロシアの姿を重ねあわせようとする向きもあるかもしれない。しかし作者ガンにそうした意図があったかどうかは甚だ疑わしい。ガンのテキストに現れるのは、ヨーロッパ文明の一部を成すロシア社会とその対比としての遊牧民社会である。その両方を受け継いだウトバーラは、エキゾチックな美貌を持ちながら、ヨーロッパ的に洗練された文化的素養と身振りを身に着けている。これはむしろ、アジア的外見とヨーロッパ的内面という二項対立であろう。そしてウトバーラはその外見のために差別されはしても、社会的にその美が認められることはない。ガンにとってのロシアは、あくまで「ヨーロッパ」だったのである。

封建的社会を支える思考や、民衆に対する収奪の上に生活する高僧を頂点とした封建的組織としての仏教に対しては、随所に批判がみられることは本文ですでに確認した通りである。一方、キリスト教に対してガンがどのような考え方を持っていたのかという問題については、検閲を考慮したガンのテキストは何も明らかにしていない。しかし、ウトバーラが「おどけ話、作り話、あるいはステップの伝説」であるオシロイバナの伝承⁸⁾に、ボリスへの心情を託して伝える時、そこでやや不自然に挿入される「仏教」的イメージは、ガン自身の宗教観を反映しているようにも思われる。

この世界の創世の時、偉大なチベットの晴れ渡った空の下、緑の草むらが葉を広げていた、太陽は一日の道を渡り終えて、陰り始めていた。[...] 草むらの一枝に目立たぬ花が一つ開いた。その花はバラのような紅で視線を惹きつけることもなければ、誇り高い蓮の花のように他の花々の上に君臨することもなかった。おとなしく、美しくないその花は、頭をもたげて偉大なブッダの世界をおずおずと見渡した。まわりの世界は真っ暗で、冷たい！[...] その時、暗い夜空に星が輝いた。その光は輝きだし、風の流れにきらめき、ひとりぼっちの花をよみがえらせた。やさしい風がそよぎ、冷たい夜露が注がれ、花は生き生きとして、再びその頭をもたげ、まわりを見回した。そしてやさしい星を見つけたのだ。(100)

チベットの高原に咲いた小さなつつましいオシロイバナは、自分を照らし夜露でやさしくくるんでくれた小さな星を忘れず、輝かしい太陽の下では身を隠しても、夜ごと小さな星に向かって花開く。「創世の時」、「偉大なブッダの世界」という表現は、この話の「異教性」を担保するためのものと捉えることも可能であるが、そこに自然の中に造物主の存在を直接感じ取ろうとするロマン主義的な感性や神秘主義的自然観を読み取ることもまた可能であろう。なお「ウトバーラ」の名は、モンゴル語では「咲く花」を意味するとされ (Pol'slaia, 2014)、サンスクリット語では「青蓮華」に通ずる⁹⁾ という。エレナ・ガンがこうした語源学的知識にどこまで通じており、主人公をウトバーラと名付けたのか、答えは謎のままである。

注

- 1) 母娘のポートレートは以下のサイトで参照することができる。Аливанцева Е. В. Елена Ган и Елена Блаватская. Неизвестный парный портрет//Общество перихов «Свет» (http://ivorg.narod.ru/blavatsk/blav_life/biograph/alivanceva.htm) (最終アクセス日 2015 年 10 月 27 日)
- 2) エレーナ公女とアンドレイ・ミハイロヴィッチは 1812 年に出会い、読書や翻訳といった共通の関心を持っていた。2 人の結婚は 1813 年に行われたが、ドルゴルーコフ家は経済的に困窮しており、またファージェエフの俸給も少なかったため、新婚の二人の経済状況は苦しかったという (Фадеев: 22–24)。
- 3) Белинский В. Г. Сочинения Зеневиды Р-вой//Собрание сочинений. Т. 5: Статьи, рецензии и заметки, апрель 1842—ноябрь 1843. М., “Художественная литература”, 1979. <http://az.lib.ru/b/>

- belinskij_w_g/text_2730.shtml (最終アクセス日 2015年10月27日)
- 4) コーカサス旅行について、ガンは「ジェレズノヴォーツクの思い出 Воспоминание Железноводска」(1838)というエッセイも認めている。
 - 5) 翻訳にあたっては、望月哲男氏のご指導を仰いだ。ただし当然、表現の責任はすべて高橋にある。
 - 6) アルフレッド・ド・ヴィニーによるフランスの歴史小説。
 - 7) ガルツピのオペラ『捨てられたディドー』の中のアリア。
 - 8) 以下の引用で言及される「小さな花」「夕べの美」が、夕方開花し明け方にはしぼんでしまうオシロイバナを指すという指摘については、Вяткина: 267を参照。
 - 9) 葛西賢太氏のご指摘による。青蓮華は優鉢羅^{うはら}と音写される。

文 献

- Andrew, J.
1993 *Narrative and Desire in Russian Literature, 1822–1849: The Feminine and the Masculine*. Basingstoke and London: The Macmillan Press.
- Aplin, H. A.
1988 “M. S. Zhukova and E. A. Gan: Women Writers and Female Protagonists 1837–1843” (Ph.D. diss., U of East Anglia)
- Layton, S.
1994 *Russian Literature and Empire: Conquest of the Caucasus from Pushkin to Tolstoy*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Белинский, В. Г.
1979 Сочинения Зенеиды Р-вой//Собрание сочинений Т.5: Статьи, рецензии и заметки, апрель 1842-ноябрь 1843. М.: Художественная литература. (ベリンスキー「ゼネイダ・エル＝ヴァ作品」)
http://az.lib.ru/b/belinskij_w_g/text_2730.shtml
- Вяткина, В. А.
2012 Трансформация калмыцких преданий в повести Елены Ган «Утбалла»//Историко-функциональное изучение литературы и публицистики: истори, современность, перспективы. Сост. Фокина А. А. Ставрополь: Изд-во СГУ, С. 264–269. (ヴィヤトキナ「カルムイク伝承のエレーナ・ガンの小説「ウトバーラ」への変容」)
- Желиховская, V. P.
1887 Елена Андреевна Ган, писательница-романистка, 1835–42 гг.//Русская старина, 53 (3): 734–766. М. Г. (ジェリホフスカヤ「ロマン主義作家エレーナ・アンドレーエヴナ・ガン, 1835–1842年」)
- М. Г.
1911 Русская женщина 30-х годов//Русская мысль, 12: 54–73. (エム・ゲー「30年代のロシア女性」)
- Некрасова, Е. С.
1886 Елена Андреевна Ган (Зенеида Р-ва) 1814–1842. Биографический очерк//Русская старина, 51 (8, 9): 335–354, 533–574. (ネクラソヴァ「エレーナ・アンドレーエヴナ・ガン(ゼネイダ・エル＝ヴァ) 1814–1842. 伝記」)
- Фадеева, N. A.
1886 Елена Павловна Фадеева, рожденная княжна Долгорукова//Русская старина, 52 (12): 749–751. (ファジェーエヴァ「ドルゴルーコヴァ公女として生まれたエレーナ・パーヴロヴァ・ファジェーエヴァ」)
- Фадеев, А. М.
1897 Воспоминания Андрея Михайловича Фадеева. 1790–1867 гг. Одесса: Тип. Высочайше утвержд. Южно-Русского Общества Печатного Дел. (『アンドレイ・ミハイロヴィチ・アンドレーエフ回顧録：1790年–1867年』)
- Польская, Е.

高橋 ブッダの世界の小さな花

- 2010 О.Е.А. Ган и ее повести «Утбалла»//Теегин герл (Свет в степи), 5: 106–108. (ボリスカヤ「Е. А. Ганとその中編小説「ウトバーラ」について」<http://kalmnlib.ru/component/content/article/630> (最終アクセス日 2015年10月27日))

デイヴィッド・シンメルペンニンク＝ファン＝デル＝オイエ

- 2013 『ロシアのオリエンタリズム——ロシアのアジア・イメージ、ピョートル大帝から亡命者まで』 浜由紀子訳、東京：成文社。

乗松亭平

- 2009 『リアリズムの条件——ロシア近代文学の成立と植民地表象』 東京：水声社。